

Title	南北朝時代古鈔本『論語集解』の研究：猿投神社所蔵本の意義
Sub Title	A study of "Lun yu ji jie (論語集解)" copied in Nanbokucho (南北朝) period: meaning of text belongs to Sanage Shrine
Author	高橋, 智 (Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2008
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.43 (2008.) ,p.153- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20080000-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南北朝時代古鈔本『論語集解』の研究
— 猿投神社所蔵本の意義 —

高橋 智

目次

序章	一五		
第一章	康安二年（一三六二）鈔本	三軸	一五
第二章	南北朝鈔本	一軸	一六
第三章	南北朝室町時代初期鈔本	一軸	一六
第四章	各本校異	卷第三公冶長篇・雍也篇、卷第四述而篇・泰伯篇	一七
(附説)	一七

序章

拙論「室町時代古鈔本『論語集解』の研究」（汲古書院・平成二十年、以下拙論とはこれを指す）は、『論語集解』の本邦に於ける古鈔本の展開が南北朝時代以前と、それ以後、すなわち室町時代とでは大きな隔たりがあることを前提にしていた。その要因が時代の流れとともに、『論語集解』をとりまく周辺環境の変化に求められることも論じた。さて、室町時代鈔本の整理を終えて南北朝鈔本を手にする時、室町とは異なつた得も言われぬ古色蒼然たる趣を感じるとともに、これほど緻密な古代の書写講読の営為が今日に伝わることに、あらためて驚きと敬意を持たないわけにはいかなのである。

南北朝時代の書写に係る『論語集解』伝本には貞和三年（一二四七）の識語を有する東洋文庫所蔵本を始めとして、数本を数えるに過ぎないが、それはまた、鎌倉時代末期の書写本と密接に連携するものであつて、南北朝時代は『論語集解』古鈔本がテキスト上、最上の位置に達した時代であつたといつて過言ではないであらう。室町時代古鈔本との比較でいえば、正平十九年（一三六四）に出版された正平版『論語』以前の姿を遺すもので、正平版の影響を色濃く受けた室町時代の産物とは当然一線を画すものとみてとれるのである。

ここに紹介する猿投神社（さなげじんじや・愛知県豊田市）蔵本（二本）は、昭和四十年、国の重要文化財に指定された一連の猿投本漢籍古鈔本類（『古文孝経』『春秋経伝集解』『論語集解』『史記集解』『帝範』『臣軌』『文選』『白

『氏文集』に含まれるものである。昭和三十九年に斯道文庫阿部隆一教授が調査を行い、同じ頃、村田正志氏が『猿投神社主要宝物目録』を編纂、また、平成十七年には豊田市教育委員会の『豊田史料叢書』に国文学研究資料館の山崎誠氏が解題を執筆された。

三種類の写本はそれぞれ完存していたものと思われるが、惜しくも現存は十分の一ほどである。その由来などの詳細は明かでないが古式の書写風格は必ず依るところがあるであろう。

第一章 康安二年（一二六二）鈔本 三軸

以下、第二・第三章の、二種類の鈔本とともに、仕切りを加えた桐箱に収納される。全紙裏打ちを施し、二十七×三十一・四 cm の新補茶色表紙を添える。約一 cm 直径一・八 cm の軸頭を加える。最初に二十七 cm の新たな遊紙を設け原紙が始まる。昭和四十二年二月重要文化財指定に際しての補修である。

全十卷二十篇のうち、巻第三の公治長第五と雍也第六（以上第一軸）、巻第七の子路第十三と憲問第十四（以上第二軸）、巻第十の子張第十九と堯曰第二十（以上第三軸）の、計六篇三卷のみの残本である。ただし、以下の部分破損などによって欠けている。

○巻第五・公治長篇第一章から第四章【賜也何如章】の首「子貢曰、賜也」までを欠す。

○巻第七・子路篇第一章から第三章【衛君待子而為政章】の注「所言之事」までを欠す。

○卷第七・子路篇第十章【苟有用我者章】の注「有成功」から第十五章【定公問一言而可以興邦章】の「定公問一言而可以興邦章」までを欠す。（これは丁度一紙分に相当）

○卷第十九・子張篇第三章【子夏之門人章】の「人何所不容我」から第五章【日知其所亡章】の「日知其所亡」注「孔安国曰日知」までを欠す。現存する冒頭にもやや破損による欠損がある。

残存のうち、卷首が存するものは次の通りである。

第一軸

「論語雍也第六 何晏集解 凡三ノ十章

子曰雍也可使南面 包氏曰可使ノ南面者言任

第二軸

「論語憲問第十四 何晏集解 凡四十ノ七章

憲問恥子曰邦有道穀 孔安国曰ノ穀禄也邦

第三軸

「論語子張第十九 何晏集解 凡二十ノ五章

子張曰士見危致命 孔安国曰致ノ命不愛其身

「論語堯曰第二十 何晏集解 凡三章

堯曰咨爾舜天之曆數在爾躬 曆ノ數

また、尾題はおの次の通りである。

「論語卷第三 經一千七百一十一字／注二千八百二十字」

「論語卷第七 經二千三百九十四字／注二千五百五十六字」

「論語卷第十 經一千二百二十三字／注一千一百七十五字」

書式は、一紙（長さ三十六・四cm）に十二行、毎行十三字にて書写し、書写に際して墨の界線（高さ二十一cm・毎行の幅二・九cm）を加える。卷三は十九枚、卷七は二十三枚、卷十は十三枚に書写し、貼りつなげて卷子装に仕立てた。おそらくは本文注文を書写し終えて、貼りつなぎ、その後訓点を書き入れているように思われる。訓点書き入れはすべて本文と同筆同時のもので、墨筆による返点・送仮名・附訓・声点・濁点・反切、朱筆によるヲコト点・縦点である。ヲコト点は経伝に属し、試みに点図を作製すると図①のようになる。

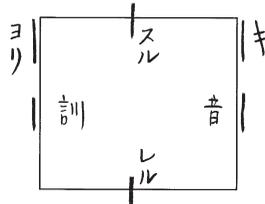
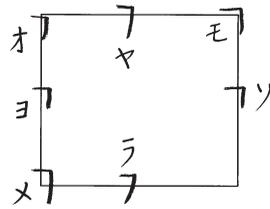
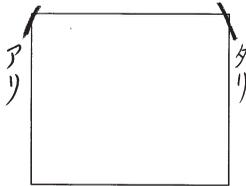
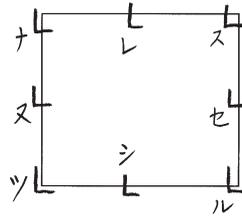
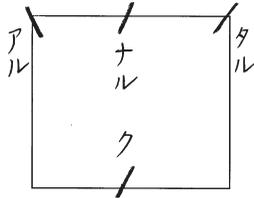
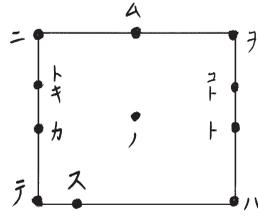
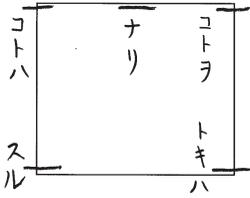
料紙はやや茶色味を帯びた楮紙であるが、裏打ちを施しているので実際のところは、はつきりしないが、薄手でつやがある。書写の墨痕はなめらかでやや淡く、字は丸みを帯びている。異体字も多い。「恒」の末筆を欠く書法も既に宋版の影響を蒙る習慣であろう。

書写者による奥書は、次の如くである。

卷第三の末（尾題から四行空けて）

「于時康安第二 十月十三日於參州渥美郡

① 康安本点図



長仙寺密藏坊読合之次書写并加点点云々

執筆甚海 春秋／参八

卷第七の末（尾題から四行空けて）

「于時康安第二 十一月一日於參州渥美郡

長仙寺密藏坊読合之次書写之

甚海 春秋／三八

卷第十の末（尾題から二行空けて）

「于時康安第二 十一月十五日參州渥美郡

於長仙寺別当坊護摩堂読合之

次書写之了

甚海 春秋／参八

ただし、卷十の奥書は、尾題までの紙質とややそぐわず、或いは別の巻の奥書を移貼した可能性もある。

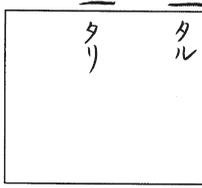
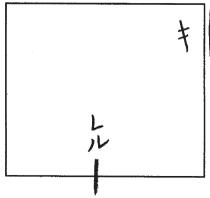
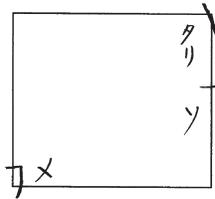
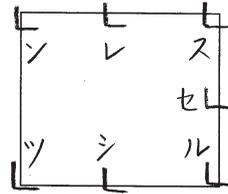
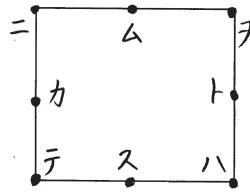
奥書中の渥美郡長仙寺は現在の愛知県田原市にある長仙寺である。ちょうど南北朝の頃は堂宇の整備が進み、十二坊を擁して隆盛を極めた。密藏坊はその一つである。

また、堯曰篇の書き入れの前に「点本无余注之」の一語を加えていることから、書写者が用いた底本にはこの注がなく、別種の伝本によって書き加えたものであることがわかる。『義疏』の小文がいつの頃から『集解』の参考に附されるようになったのかは、『義疏』の流伝史とも密接に関わることであるが、既に、東洋文庫蔵正和四年（一二一五）鈔『論語集解』の欄外にこの小文が書き入れられているのであって、鎌倉時代には流行していた事実がうかがえる。本書のこうした書き入れも興味深い痕跡を遺しているといえるであろう。

第二章 南北朝鈔本 一軸

第一章の康安鈔本と同様に、全紙に裏打ちを施し、約一・五cm（半径一・五cm）の軸頭を加える。この一軸に収められた卷第三の鈔本には、実は二種類の鈔本が混入しているのである。ともに南北朝の書写と認められるが、一方は南北朝から室町の初期とも見られるものである。その、南北朝から室町初期と見られるものは、前半の二紙二十六行で、卷第三公治長篇第五の第八章【孟武伯問子路仁乎章】の注文「夫称家諸侯千乘」から、第十五章【孔文子何以謂之文也章】の注文「文諡也」までを存す。この二十六行・二紙についての書誌は次の通りである。第一紙が十六行・第二紙が十行、毎行十四字であるが、前後はきれいに切り取られているので、そもそも毎紙に何行書写されたのかは不明である。第一紙が長さ四十一・六cm、第二紙が長さ二十六・六cm。紙高は上下が破損しているが、おおよそ二十cmほどである。墨の界線があり、高さが二十三・九cm、幅が二・六cmである。紙質は厚手でやや白味を帯びる。墨

②南北朝鈔本（公治長残二紙）点図



痕は古く、異体字も多い。また、本文と同筆の返点・送仮名・縦点・附訓を加え、朱のヲコト点を附す。点図は図②のように表される。

次に南北朝鈔本と見られるものは、この二紙に続くが、この二紙とは、実は全く別の鈔本でありながら内容が直接つながるために、一具の鈔本と誤解されているようである。第十五章【孔文子何以謂之文也章】の注文「文諡也」の「也」字から始まり、本文の「子曰敏而好学……」と続く。卷五公治長篇第五は最後まで存し、雍也篇第六は、次のように題す。

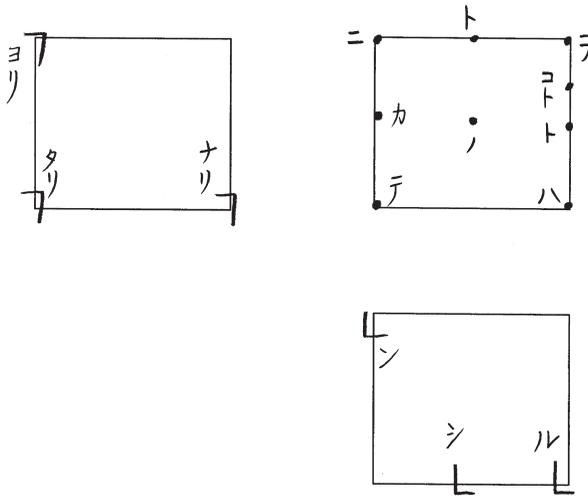
「論語雍也第六 何晏集解 凡三十章

子曰雍也可使南面也 苞氏ノ曰（可）使

（「可」字は補筆する）

途中、第十九章の注「道而亦生者……」から第

③南北朝鈔本点図



二十二章【樊遲問知章】の經文「後獲可謂仁矣」まで、約一枚を欠く。また、最後第三十章【如能博施於民章】の經文「謂仁之方也已」以下とその注文も欠く。従って尾題は見えない。

全部で十六枚の料紙に、毎紙十二行乃至十二行半に書写する。この鈔本を見るに、文字が紙と紙のつなぎ目に重なっているところから、紙を貼りつなぎ合わせてから、書写しているように思われる。

但し、第八・九紙は毎紙九行、第十紙は毎紙八行半に書写する。每行は十一字である。小字は双行。料紙の高さは約二五・五cm、毎紙の長さが三七・五cm、墨界（高さ二四・三cm幅三cm）を施す。

紙質はやや薄手の白味を帯びた楮紙系のもので、書写の墨痕は濃厚にして力あり、字は大にして硬質で雄渾、一見、稚拙な字様に見えるが、老学の力こもる書写とみる。時代的にも南北朝の風をよく伝えているといえよう。

また、本文同筆による返点・送仮名・縦点・附訓・反切・声点を加え、上欄には補注を加えているが惜しくも裁断されている。少々朱によるヲコト点を加える。紀伝に属する。点図は図③のようである。

公治長篇第五の第二十八章「不如丘之好学者也已」について、「才无／疏有」と校異を加えている。こうした校異は少々見うけられるが、才とは摺本、つまり印刷本のこととて、疏とはおそらく『論語義疏』を指すのではないかと思われ、宋版や『義疏』の影響が想像されるところである。

第三章 南北朝室町時代初期鈔本 一軸

補修裏打ち、後補の装訂は皆、前二者と同じである。巻第四の述而篇第七末尾と泰伯篇第八を存し、第八は中間に欠葉があり巻末には補鈔が加えられる。

すなわち、述而篇の第三十四章【若聖與仁章】の一句「弟子不能学也」の「学」字以下から第三十八章（述而篇の末）までを存す。また続いて泰伯篇第八は中間、第七章【士不可以不弘毅章】から第二十章【舜有臣五人章】の経文「九人而已」の注「孔安国曰」までを欠き、続く注「唐若堯号：」以下二十一章（泰伯篇の最後）までを存す。

そして、「唐者堯号：」以下最後までの一紙はやや注意を要し、原紙の上下と最後二行が欠落破損し、江戸時代から明治時代くらいにかけて補修補写を加えているのである（下図参照）。最後の二行「洳洳広深八尺也（以上注）禹吾無間然矣／論語卷第四」は、補修によって加えた紙とも違い、全く別紙を補貼しているようである。字様は原紙の上下を補って補写したその手と同じ手に見える。

泰伯篇第八の首は次のように題する。

唐者克歸也漢餘歸也晉者克歸
 之會之問也斯此也周也言克歸
 葉之會之問也此也周也言克歸
 葉之會之問也此也周也言克歸
 而巳大也難得 登分天下有其
 宜不然半也
 二以張事覆周德其可謂至德
 也巳矣 克歸也曰覆紆流也文王
 之民歸周者三分有二而稱
 以張事覆政謂之至德也 子
 曰禹吾元聞然矣 子推而曰
 之盛言也不能 罪歎食而致學
 復問則其間也 罪歎食而致學
 乎思神焉 融曰張薄也或孝
 衣朕而致美乎藏冕 孔安國曰
 以盛衣 服也 早宮室而盡力乎溝洫
 也代曰云里為 非 間有溝
 廣深也 尺八 十里 為城 間有
 深八尺也 高喜樂聞然矣

論語卷第八

「論語泰伯第八 何晏集解

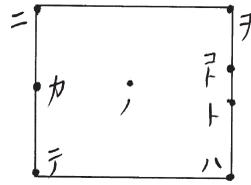
子曰泰伯其可謂至德也已矣」

もとの原紙は全部で五枚、一紙の長さ約三十二・三 cm、高さ約
 二十五・三 cm で、毎紙に十二行、毎行十二字（小字双行）で書写
 する。界は設けず、字面の高さは約二十三 cm である。一行の幅は
 約二 cm である。紙質はやや白っぽく感じられる、楮紙系のもので
 ある。

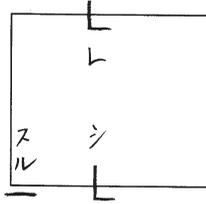
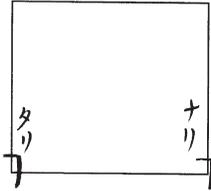
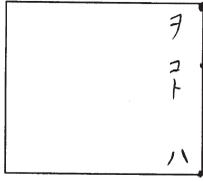
また、最後の二行の補写部分は、以上とは別紙で、厚手の織維
 質の楮紙であり、押界（高さ二三・七幅二・三 cm）がある。こ
 の点からしてもこの二行が補貼であることはあきらかである。

本文の字様には特徴があり、堅い筆運びで墨痕濃厚、力がある。
 書き入れは本文同筆の返点・送仮名・縦点・附訓・声点を加え、
 朱のヲコト点を附す。点図は図④の如く、紀伝に属する。

④南北朝室町初鈔本点図



(卷末別紙点図)



第四章 各本校異 卷第三公冶長篇・雍也篇、卷第四述而篇・泰伯篇

凡例

本校異は阮元『論語注疏校勘記』の清嘉慶間刊単行本をもとにする。底本は嘉慶二十一年南昌府学刊本『論語注疏解經』である。注文は一格下げる。拙著「慶長刊論語集解の研究」(『斯道文庫論集』第三十輯・平成八年)をも参照。

公冶長篇第五

4、【賜也何如章】

女器也 康安本女作汝、注同

孔曰 康安本作孔安国曰、以下注同

包曰 康安本作包氏曰 以下注同

器用之人 康安本人下有也

黍稷之器 康安本器下有也

宗廟之器貴者 康安本作宗廟器之貴者也

5、【雍也仁而不章】

馬曰 康安本作馬融曰、以下注同

仲弓名 康安本名下有也

姓冉 康安本冉下有求也、求字有傍注「不誦也」

以給 康安本作以口給

憎於人 康安本人作民

不知其仁焉用佞 康安本作不知其仁也焉用佞也

為人所憎惡 康安本作為民之所憎惡之也

6、【子使漆彫開仕章】

未能信 康安本信下有也

弟子 康安本作弟子也

漆彫姓開名 康安本彫·名二字下有也

未能究習 康安本習下有也

鄭曰 康安本作鄭玄曰、以下注同

善其志道深 康安本作喜其志道深也

7、【道不行章】

其由與 康安本由下有也

竹木 康安本竹下有也

大者曰棧 康安本棧作筏

俱行 康安本行下有矣

過我 康安本我下有也

桴材 康安本材下有也

戲之耳 康安本耳下有也

所取哉 康安本所下有復

唯取於己 康安本己下有也

古字材哉同 康安本作古材哉同耳也

8、【孟武伯問子路仁乎章】

賦兵賦 康安本作賦兵賦也

卿大夫之邑 康安本邑下有也

大夫百乘 康安本作卿大夫故曰百乘也

宰家臣 康安本臣下有也

公西華 康安本華下有也 南北朝本作公華西也

為行人 康安本人下有之也 南北朝本人下有也

9、【女與回孰愈章】

女與回也 康安本南北朝本女作汝

吾與女弗如也 康安本女作汝

子貢不如復 南北朝本不作弗

吾與女俱 康安本女作汝

慰子貢也 康安本子貢下有有心字

10、【宰予昼寢章】

孔曰宰予弟子宰我 南北朝本作苞氏曰、康安本宰我下

有也

朽木不可雕也 南北朝本無也

彫彫琢刻畫 康安本刻畫下有也

境饒也 南北朝本作壤

此二者以喻雖施功猶不成 南北朝本無此以二字、康安

本南北朝本成下有也

責於女 南北朝本作汝

深責之 康安本南北朝本之下有辭也二字

改是聽言信行 康安本南北朝本是下有始、行下有今

宰我之昼寢 康安本寢下有也

11、【吾未見剛者章】

魯人 康安本南北朝本人下有也

情慾 康安本南北朝本慾下有之也

12、【我不欲人之加諸我也章】

無加諸人 康安本南北朝本人下有也

加陵也 南北朝本無也

於己 康安本南北朝本已下有之也二字

13、【夫子之文章章】

可以耳目循 南北朝本可下有得、康安本南北朝本循作

修

不可得而聞也 康安本也作已矣、南北朝本作也已矣

14、【子路有聞章】

未之能行 南北朝本無之字

未及行 康安本南北朝本及下有得

15、【孔文子何以謂之文也】

衛大夫孔圉 康安本南北朝本孔下有叔、南北朝本圉下

有也

下問謂凡材已下者 康安本南北朝本謂作問、者下有也

16、【子謂子產章】

公孫僑 康安本作公孫僑也、南北朝本作公孫僑之也

使民也義 南北朝本無也字

17、【晏平仲章】

久而敬之 康安本南北朝本而下有人

周曰 康安本南北朝本作周生烈、以下注同

晏姓平諡名嬰 康安本南北朝本作晏姓也平諡也名嬰也

18、【臧文仲居蔡章】

臧孫辰 康安本南北朝本辰下有也

蔡国君之守龜 康安本南北朝本龜下有也

去之

居蔡僭也 康安本南北朝本蔡下有之本二字

至於他邦則 康安本則下有又

刻鏤為山 康安本南北朝本山下有也

違之一邦 康安本無下之字

稅者梁上 康安本南北朝本上下有之字、南北朝本稅作

文字辟惡逆去無道 南北朝本辟作避、康安本南北朝本

沢

無去字

楹畫為藻文 南北朝本畫下有以字、康安本文下有也

無有可止者 康安本南北朝本可止者作可者也

奢侈 南北朝本侈下有也字

20、【季文子三思而後行章】

非時人謂之為知 康安本之作以、知下有之、南北朝本

再斯可矣 康安本南北朝本再下有思

謂下有以、知下有之

鄭曰 康安本南北朝本作鄭玄曰、以下注同

19、【令尹子文章】

字於菟 康安本無字字、康安本南北朝本菟下有之也二

不必乃三思 康安本思下有之也二字、南北朝本有之字

字

21、【甯武子章】

令尹何如 南北朝本有也字

甯兪 康安本南北朝本有也字

但聞其忠事未知其仁也 康安本南北朝本此注作孔安國

佯愚 康安本佯作詳

曰、南北朝本無忠字

22、【子在陳章】

齊大夫 康安本有也字

所以裁之 南北朝本有也字

其四十四匹馬違而去之 康安本無其字、南北朝本無違而

故曰 康安本南北朝本無故字

狂簡者 康安本南北朝本無簡字

康安本南北朝本人下有也

妄作穿鑿 康安本南北朝本無作字

孔曰懷婦也 康安本婦作安、南北朝本無此五字

裁之耳 康安本作裁制之耳、南北朝本作裁制耳

27、【已矣乎章】

遂婦 康安本南北朝本有之也二字

能自責 康安本南北朝本有也字

23、【伯夷叔齊章】

28、【十室之邑章】

二子 康安本南北朝本有也字

好學也 康安本作好學者也、南北朝本作好學者也已

国名 南北朝本有也字

24、【孰謂微生高直章】

雍也篇第六

微生姓 康安本南北朝本有也字

非為直人 康安本南北朝本有也字

康安本南北朝本作論語雍也第六 何晏集解 凡三十章

25、【巧言令色足恭章】

便僻貌 康安本南北朝本作便僻之貌也

1、【雍也可使南面章】

魯太史 康安本有也字

雍也可使南面 南北朝本面下有也

外詐親 康安本有也字

言任諸侯治 康安本南北朝本作言任諸侯可使治國、南

26、【顏淵季路侍章】

北朝本國下有也

不自稱己之善 康安本南北朝本作自無稱己之善也

2、【仲弓問子桑伯子章】

不以勞事置施於人 康安本不作無、南北朝本作無不、

孔安國曰以其能 南北朝本無孔安國曰四字

寬略則可 康安本南北朝本有也字

字、讓下有也字

太簡 康安本南北朝本太作大、南北朝本有也字

五百家為党 康安本南北朝本有也字

3、【袁公問弟子章】

6、【子謂仲弓章】

袁公問弟子 康安本南北朝本問下有曰

犁雜文 康安本有也字、南北朝本雜作新

顏回任道 康安本南北朝本回作淵

駢赤也 康安本也作色、南北朝本赤下有也字

未嘗復行 康安本南北朝本有也字

犧牲 康安本有也字

4、【子華使於齊章】

其所生犁 南北朝本作犁牛

赤之字 康安本南北朝本作赤字也

不害於子之美 康安本南北朝本子上有其、美下有也字

包曰十六斗曰庾 康安本南北朝本作十六斗作庾也

7、【回也其心三月不違仁章】

五秉合為八十斛 康安本南北朝本無為字、有也字

余人暫有 康安本南北朝本余上有言字

冉有有與之太多 康安本南北朝本有也字

不變 康安本南北朝本有也字

5、【原思為之宰章】

8、【季康子問仲由章】

弟子原憲 康安本南北朝本有也字

決斷 康安本南北朝本有也字

家邑宰 康安本有之也二字、南北朝本有也字

通於物理 康安本南北朝本有也字

九百斗 康安本南北朝本有也字

曰賜也達、曰求也藝 康安本南北朝本二曰上有子字

辭辭讓不受 康安本南北朝本無上辭字、受下有也字

多才藝 康安本南北朝本作多才才能也

祿法所得當受無讓 康安本南北朝本無得字、無下有以

9、【季氏使閔子騫為費宰章】

費季氏邑 康安本有也字

邑宰數畔 康安本無數字

子騫賢故欲用之 康安本子上有閱字、之下有也字

託使者 康安本南北朝本託作語、者下有曰字

善為我辭焉說令不復召我 康安本南北朝本我下有作字、

無焉字、康安本我下有之也

二字

召我 康安本南北朝本有也字

欲北如齊 康安本南北朝本有也字

10、【伯牛有疾章】

弟子冉耕 康安本南北朝本有也字

包曰牛有惡疾 康安本南北朝本無牛字、南北朝本惡上

有牛字

疾甚 康安本作疾甚之

喪之 康安本南北朝本之下有也字

命矣夫斯人也而有斯疾也斯人也而有斯疾也

南北朝本又
有此十九字

痛惜之甚 康安本南北朝本有也字

11、【賢哉回也章】

簞筲也 康安本南北朝本下有瓢瓢也三字

陋巷 康安本有也字

其所樂 康安本南北朝本有也字

12、【非不說子之道章】

冉求曰 康安本南北朝本冉有、康安本無曰字

子之道 康安本南北朝本有也字

今女 南北朝本女作汝

非力極 康安本下有之也、南北朝本下有也

13、【子謂子夏章】

女為君子儒 南北朝本女作汝

無為小人儒 南北朝本無誤女

明道 康安本作明其道

矜其名 康安本下有之也、南北朝本下有也字

14、【子游為武城宰章】

魯下邑 康安本南北朝本有也字

女得人焉耳乎 南北朝本女作汝、乎下有哉字

焉耳乎 康安本乎下有哉字

皆辭 康安本有也字

曰有澹台滅明 南北朝本作对曰

滅明名 康安本南北朝本有也字

其公且方 康安本南北朝本有也字

15、【孟之反不伐章】

孔曰 南北朝本作苞氏曰

孟之側 康安本南北朝本有也字

伐其功 康安本有之也、南北朝本有也字

殿在軍後 康安本南北朝本下有者也二字

曰我非敢在後拒敵 南北朝本曰作故曰、康安本拒作距、

敵下有也字

不能前進 康安本南北朝本前進作進也

16、【不有祝鮀之佞章】

免於今之世矣 南北朝本無矣字

衛大夫子魚也 康安本南北朝本子上有名字

宋之美人 康安本南北朝本作宋國之美人、南北朝本有

也字

善淫言 南北朝本善下有好事

難乎 康安本南北朝本乎作矣

今之世害也 康安本無之字、南北朝本世下有之字

17、【誰能出不由戶章】

不由戶 南北朝本戶下有者字

孔曰言人立身成功 康安本無孔曰二字

譬猶出入要當從戶 康安本南北朝本猶下有人字、戶下

康安本有之也二字、南北朝本有也

字

18、【質勝文則野章】

質少 康安本南北朝本下有者也二字

相半之貌 康安本有也字

19、【人之生也直章】

人之生也 南北朝本無之字

言人所生於世 康安本南北朝本人下有之字、所作所生

正直也 康安本南北朝本直下有之道二字

亦生者 康安本無者字

而免 康安本下有者也

20、【知之者章】

樂之者深 康安本下有也字

21、【中人以上章】

可上可下 康安本下有也字

22、【樊遲問知章】

民之義 康安本下有也字

曰仁者先難 康安本曰上有子字

而後得 康安本作後乃得、南北朝本作乃得

所以為仁 康安本南北朝本下有也字

23、【知者樂水章】

其才知 南北朝本知作智

不知已 康安本下有也字

万物生焉 康安本南北朝本下有也字

日進故動 康安本南北朝本日作日、動下有也字

故靜 康安本南北朝本有也字

鄭曰知者 南北朝本知作智

故樂 康安本南北朝本下有之也

性靜者多寿考 南北朝本性作姓、無多字、康安本南北

朝本者作故、考下有也字

24、【齊一變章】

周公之余化 康安本有也字

大道行之時 康安本有也字、南北朝本有之也二字

25、【觚不觚章】

觚礼器 康安本南北朝本有也字

二升曰觚 康安本南北朝本有也字

為政不得 康安本南北朝本為政下有而字

不成 康安本南北朝本有也字

26、【仁者雖告之曰章】

并有仁焉其從之也 康安本南北朝本仁下有者字、南北朝

本無之字

宰我以仁者 康安本南北朝本以下有為字

有仁人 康安本人作者

從而出之不乎 康安本無從字、康安本南北朝本不乎作

乎否乎

觀仁者 康安本南北朝本者作人

所至 康安本南北朝本有也字

孔曰逝往也 南北朝本孔作苞氏

不肯自投從之 南北朝本作不可肯投從之

令自投下 康安本南北朝本有也字

27、【君子博學於文章】

不違道 康安本南北朝本有也字

28、【子見南子章】

旧以南子者 康安本南北朝本旧作等、以下有為字、無

者字

衛靈公夫人 康安本南北朝本有也字

行治道 康安本南北朝本有也字

故夫子誓之 康安本下有曰字、南北朝本夫子作孔子

義可疑焉 康安本焉作也、南北朝本焉作也焉

29、【中庸之為德也章】

常行之德 康安本南北朝本有也字

非適今 康安本有已也二字、南北朝本有也字

30、【如有博施於民章】

如有博施於民而能濟眾 康安本南北朝本有作能、眾下有

者字

君能廣施 康安本南北朝本君作若

病其難 康安本南北朝本有也字

仁者之行 康安本有也字

皆恕己所欲而施之於人 康安本作皆恕於己所不欲而勿

施於人也

康安本 論語卷第三 經一千七百一十一字／注二千八百

二十字

述而篇第七

34、【若聖与仁章】

不能学 南北朝室町初本有也字
仁政乎 南北朝室町初本有也字

35、【子疾病章】

請於鬼神 南北朝室町初本有也字
鬼神之事 南北朝室町初本有乎字
子路失指 南北朝室町初本指作旨。
誅禱篇名 南北朝室町初本有也字

36、【奢則不孫章】

俱失之 南北朝室町初本有也字
不及礼 南北朝室町初本有耳字

37、【君子坦蕩々章】

寬広貌 南北朝室町初本広作曠、有也字
憂懼 南北朝室町初本有也字

38、【子温而厲章】

恭而安 南北朝室町初本有也字

泰伯篇第八

南北朝室町初本作論語泰伯第八 何晏集解

1、【泰伯章】

無得而称焉 南北朝室町初本得作德

2、【恭而無礼章】

畏懼之貌 南北朝室町初本有也字
常畏懼 南北朝室町初本有也字

旧行之美者 南北朝室町初本有也字

不偷薄 南北朝室町初本有也字

3、【曾子有疾章】

不敢毀傷 南北朝室町初本傷下有之字
常戒慎恐有所毀傷 南北朝室町初本戒作誠、毀傷下有

也字

吾知免夫小子 南北朝室町初本小作少

今日後我 南北朝室町初本今日下有而字

呼之者 南北朝室町初本無之字

識其言 南北朝室町初本有也字

4、【曾子有疾孟敬子問之章】

欲戒敬子 南北朝室町初本戒作或

我將死 南北朝室町初本將作且

善可用 南北朝室町初本有也字

不敢暴慢之 南北朝室町初本之作也

則人不敢欺詐之 南北朝室町初本之作也

能順而說之 南北朝室町初本無之字

入於耳 南北朝室町初本有也字

敬子忽大務小 南北朝室町初本忽作忘

戒之以此 南北朝室町初本無之字、有也字

礼器 南北朝室町初本有也字

5、【以能問於不能章】

見侵犯不報 南北朝室町初本犯下有而字、報下有也字

友謂顏淵 南北朝室町初本有也字

6、【可以託六尺之孤章】

曾子曰可以託 南北朝室町初本無曾字

幼少之君 南北朝室町初本有也字

撰君之政令 南北朝室町初本撰作構、令作命也

定社稷 南北朝室町初本有也字

不可傾奪 南北朝室町初本有之也二字

中欠

20、【舜有臣五人】

虞者舜号 南北朝室町初本無者字、号下有也字

交會之間 南北朝室町初本有也字

斯此也 南北朝室町初本作斯此比周也

尚有一婦人 南北朝室町初本尚作猶

不然乎 南北朝室町初本有也字

三分天下 南北朝室町初本本三作參

周之德可謂至德 南北朝室町初本無之字、可上有其字

天下歸周 南北朝室町初本天下下有之民二字

故謂之至徳 南北朝室町初本有之也二字

以盛祭服 南北朝室町初本有也字

21、【禹吾無間然章】

十里為成成間 南北朝室町初本成二字共作城字

功德之盛美 南北朝室町初本無美字

深八尺 南北朝室町初本有也字

廁其間 南北朝室町初本有也字

致孝鬼神 南北朝室町初本孝下有乎字

南北朝室町初本 論語卷第四

祭祀豊絜 南北朝室町初本有也字

(附説)

ここに記した文字の異同によつて、「也」「矣」などの助字が豊富に置かれていることから、室町時代の鈔本とは一線を画することが見て取れるが、零本でその全貌は明かでないために、テキストの性格を安易に定めることはできない。ただ、少しく他本との比較に於いてその位置を推測するならば、次のような例を参考にすることができるであろう。

公治長篇第二十六章【顔淵季路侍章】に、次のような校異がある。「孔曰懐婦也 康安本婦作安、南北朝本無此五字」これは本文「少者懐之」に対する注「孔安国曰懐安也」の校異である。阮元の十三經注疏本は孔安国を省略して孔の一字にする。建武四年へ一三三七〇本（大東急記念文庫蔵）、清原宣賢本（大阪府立中之島図書館蔵）は阮元本

と同様に作る。そこで康安本は「懷安也」とするが、これは正和四年（一三一五）本（東洋文庫蔵）、嘉暦二年（一三二七）本（宮内庁書陵部蔵）、觀応一年（一三五〇）本（台北故宮博物院蔵）と同じである。また、貞和三年（一三四七）本（東洋文庫蔵）は「鄭玄曰懷安也」に作って「鄭玄」は異なるが「懷安也」は同じである。却って、猿投南北朝本はこの注が無いが、正平十九年（一二六四）刊刻の正平版『論語』にも無い。無論、康安本も「この注不読」と校勘し、他の鈔本も参看していたことがわかるが、この注は古くは存在したもので、しかも「安」に作るのが古いかたちであったが、その後削除されていたものと推測される。従って、正平版以降の影響を蒙って（或いはその前後相互に影響しあって）、おしなべてテキスト上からこの注は消えていくのである。ここに、正平版を境界としてテキストが大きく転換していく姿の一端を見ることができるといえよう。即ち、康安本と南北朝本の位置も、この境界によって大きく色分けできるものとらえることができるであろう。『論語集解』古鈔本はまことに正平版と密接に関わりを持ち、その出現によって変革を遂げていくのである。